第三高等中学校移転時に作成された測量図と派生する諸問題
―京都大学吉田キャンパスにおける土地利用の一齣―

千葉　豊

1　京都大学文書館所蔵資料の展示

京都大学文書館は,「この地に百三十年―吉田キャンパス成立史―」という企画展示（会期：2019年７月18日～10月６日）を百周年時計台記念館１階歴史展示室でおこなった。幕末の尾張藩吉田屋敷の設置，そして第三高等中学校の移転から京都帝国大学の成立までの状況が文献史料，新聞記事，写真，出土遺物などを通して解説されており，有意義な展示であった。そこに，文書館が所蔵している「山城國愛宕郡吉田村地内第三高等中学校豫定敷地實測図」（以下,「實測図」と略す）の標題をもつ測量図が展示に供されていた。これは「豫定敷地」と記されているように，大阪から京都へ第三高等中学校が移転するにあたって取得した敷地（現在の本部構内）を明示し，どのような校舎をどこに配置するかを描いたものであった（図100)。

この測量図が興味深いのは，建設予定の校舎などとともに移転地に現存していた道路や水路・民家などが克明に描かれていたことである。移転地，すなわち現在の本部構内の西半分は，幕末に尾張藩吉田屋敷が設けられた地にあたる。屋敷が設置されたさい，京と近江を結ぶ幹線道の一つであった白川道[(1)]が屋敷地のなかに取り込まれて断ち切られた。そうした状況が「實測図」にも反映されており，構内の東半では白川道とその南側に水路が認められるが，西半では道路の存在は確認できず，本来，白川道に沿ってはしっていたと推定できる水路のみが延びて東一条で現存する白川道脇の水路へと接続していることをみてとれる。また，予定敷地のほぼ中央を南北に延びる形で描かれた道路は，白川道をはさんでクランク状になるが，この特徴は，江戸時代の村絵図「山城國吉田村古図」[(2)]に描かれている道路の特徴とも一致している。

このように，本図は学校設置以前と以後の状況をつなぐ測量図として，尾張藩吉田屋敷の敷地境界がどのようであったかを推定する手がかりとなるだけでなく，江戸時代から続く道路や水路などが第三高等中学校から京都帝国大学へと変遷する過程でどうなったのかなど，土地利用のあり方に関しても子細に検討できる重要な資料なのである。本稿では，本図を紹介しつつ派生する問題を論じたいと思う。

2　「實測図」と大学敷地境界

本章では，「實測図」を紹介しつつ，京都大学へと受け継がれた敷地境界がどのように変遷したのかについてみてみることにしよう。

「實測図」（図100）は，「本校建築ニ関スル一件書類　明治二十年十二月装」の名称で，京都大学文書館に収蔵されている（識別番号：三高－１－1315）[3]。横106.5cm，縦75.8cmの和紙に，道路や水路，民家，建設予定の校舎などが異なる色で着色され，敷地面積を「五万弐千七百八拾二坪二合九勺」とし[4]，縮尺600分１で描かれている[5]。

「實測図」に記された第三高等中学校とは，大阪に設置されていた「大学分校」（その前身は「大阪中学校」）が1886（明治19）年４月，中学校令に基づいて「第三高等中学校」へと改称された官立の教育機関であり，同年11月に京都に移転することが決定された。京都での移転地は候補がいくつかあったようだが，最終的に吉田村が移転先となり，1887（明治20）年４月23日に正式な買い上げがおこなわれた〔辻・前田・飛鳥井1975〕。校舎が完成し，大阪から京都・吉田の地へと移転が完了したのは1889（明治22）年９月のことであった。その後，第三高等中学校は1894（明治27）年の高等学校令に基づき，第三高等学校へと改組される。そして，1897（明治30）年６月，京都帝国大学が設置されると，第三高等学校の敷地と校舎は大学へと譲られ，第三高等学校は京都府の寄贈によって南側の隣接する地域（現・吉田南構内）へと移転したのであった。

さて，「實測図」に戻ろう。本図には，「明治二十年十二月装」とあるので，1887年12月に浄書されたことがわかる。用地の正式な買い上げは同年４月23日であるから，それ以前から用地買収のための簡易的な測量調査や土地の現況調査はおこなっていたのであろうが，本格的な測量調査は４月下旬以降，進められたのではなかろうか。そうした測量データと設置予定校舎の設計図を組み合わせて作成されたのが本図であると考える。

図には，取得した用地の境界とともに用地の内外にある道路や水路，土手，民家などが記され，さらに建設予定の校舎が書き加えられている[6]。用地内で描かれているのは，道路，水路，土手，建物である。描かれた建物は，南西辺に１棟，北端中央付近に１棟，中央南辺の南北道路の東側に６棟描かれるが，そのほかは空白の地となっており，大部分の土地は耕作地（畑地）であったとみてよいだろう[7]。このなかで，水路に関しては，第４章で改めて検討したい。

用地の境界は東西南北いずれも道路で画される。北側および西側は既存道路が敷地境界

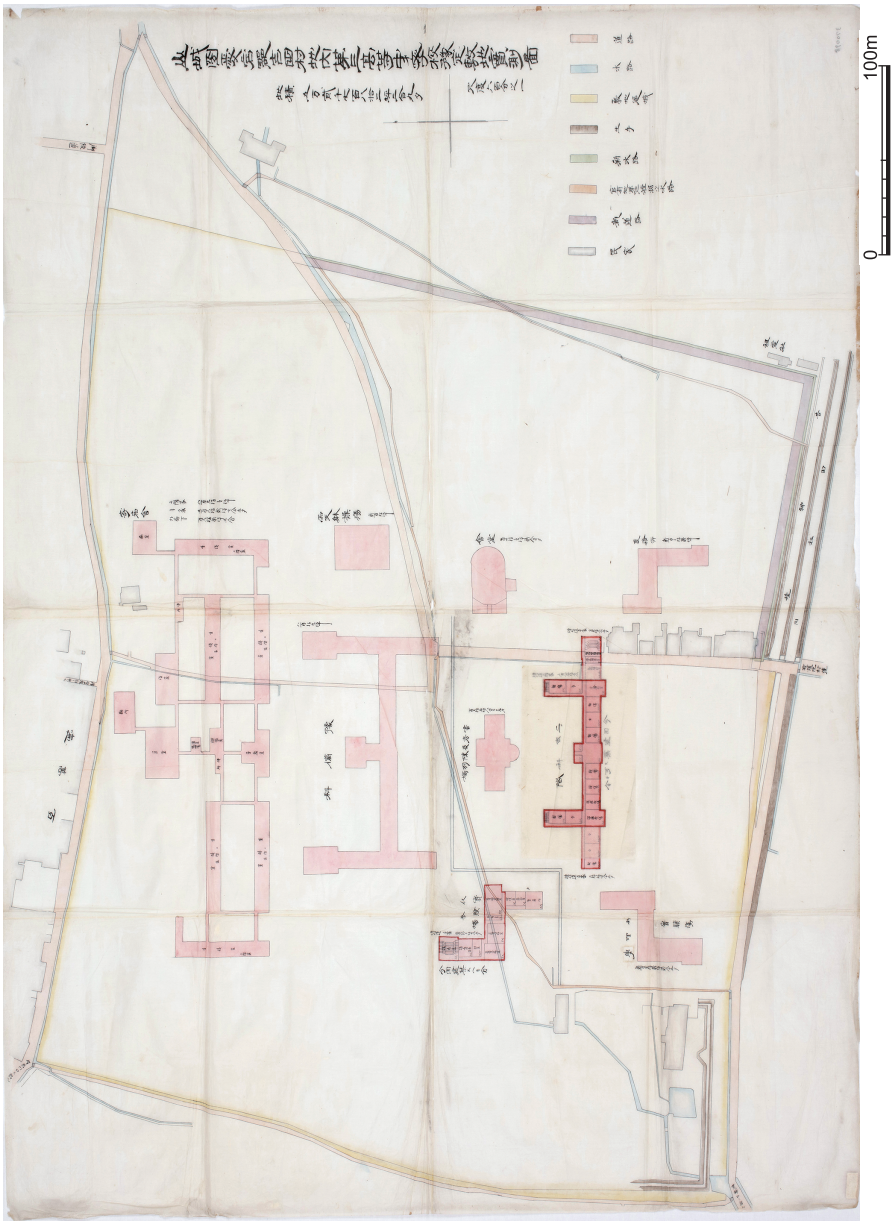


図100　山城國愛宕郡吉田村地内第三高等中学校豫定敷地實測図　縮尺1/4000

となる。南側は，その西半分は既存道路が境界となる。この道路はそのまま東へ進むと吉田神社の参道へと接続するが，吉田神社参道のほうが道幅が広く北へ張り出しているため，神社参道の北側に道路を新設して境界としている。一方，東側の境界は新設された直線道路によって画されており，この道路は南端で西へ折れ曲がり，南端に新設された道路と接続している。東を画する新設道路は北東方向から延びてくる道路（白川道）とぶつかるところまでは描かれているが，その先はまだ工事が進んでいなかったのか描かれておらず，用地の境界ラインのみが記されている。

図101は，我々が大学構内の調査地点を示すために用いている2500分１の都市計画図に，「實測図」の予定校舎だけ省略し浄書したものを2500分１に縮小して重ねたものである。重ね合わせについては，現存する白川道の道筋，吉田神社の参道，構内東側を画する新設道路などを基準にしたが，微妙にずれが生じるため，都市計画図を原寸大，99％縮小，98％縮小の３種類用意して重ね合わせてみた。その結果，総合的に勘案して99％縮小の図がもっとも一致すると判断して，この重ね合わせを採用することにした[8]。

最初に，敷地境界がどのように変遷したのかを現在の状況と比較して見ておこう。まず東側は新設された道路がそのまま敷地境界となっており，変化は見られない。南側は吉田神社参道の北側の箇所は新設道路がそのまま境界となっている。参道の西側の道路（現・東一条通）は，参道の幅に合わせるように拡幅され，東西の直線道路となっているが，これは西半では南側へ拡幅，東半では南北両側へ拡幅した形となっている。次に，西側を画する道路（現・東大路通）は，中央付近および北東角あたりで敷地を削った部分が認められるが，大部分は道路を西側へと拡幅している。最後に，北側を画する道路（現・今出川通）は，直線道路とするために，西半では道路を北側へと拡幅し，東半では敷地を削って南側へと拡幅していることが判明する。

このように，東側を除く南北および西側の敷地境界は道路の拡幅などとともにその形を大きく変えている。それはいつ生じた出来事なのであろうか。近代に作成された地形図や都市計画図を手がかりに考えてみよう（図102）。1892（明治25）年に刊行された仮製２万分１地形図（図102－ａ）では，縮尺の精度を勘案しても「實測図」で描かれた敷地境界との違いを認めることはできない。ところが，1910（明治43）年刊行の正式２万分１地形図（図102－ｂ）では，北側および西側を画する道路に変化は見られないものの，南側を画する道路は，吉田神社参道へ向けて一直線となっていることがわかる。すなわち，1892年から1910年のあいだで，南側の敷地境界に関しては道路の拡幅や道路の南側に存在した

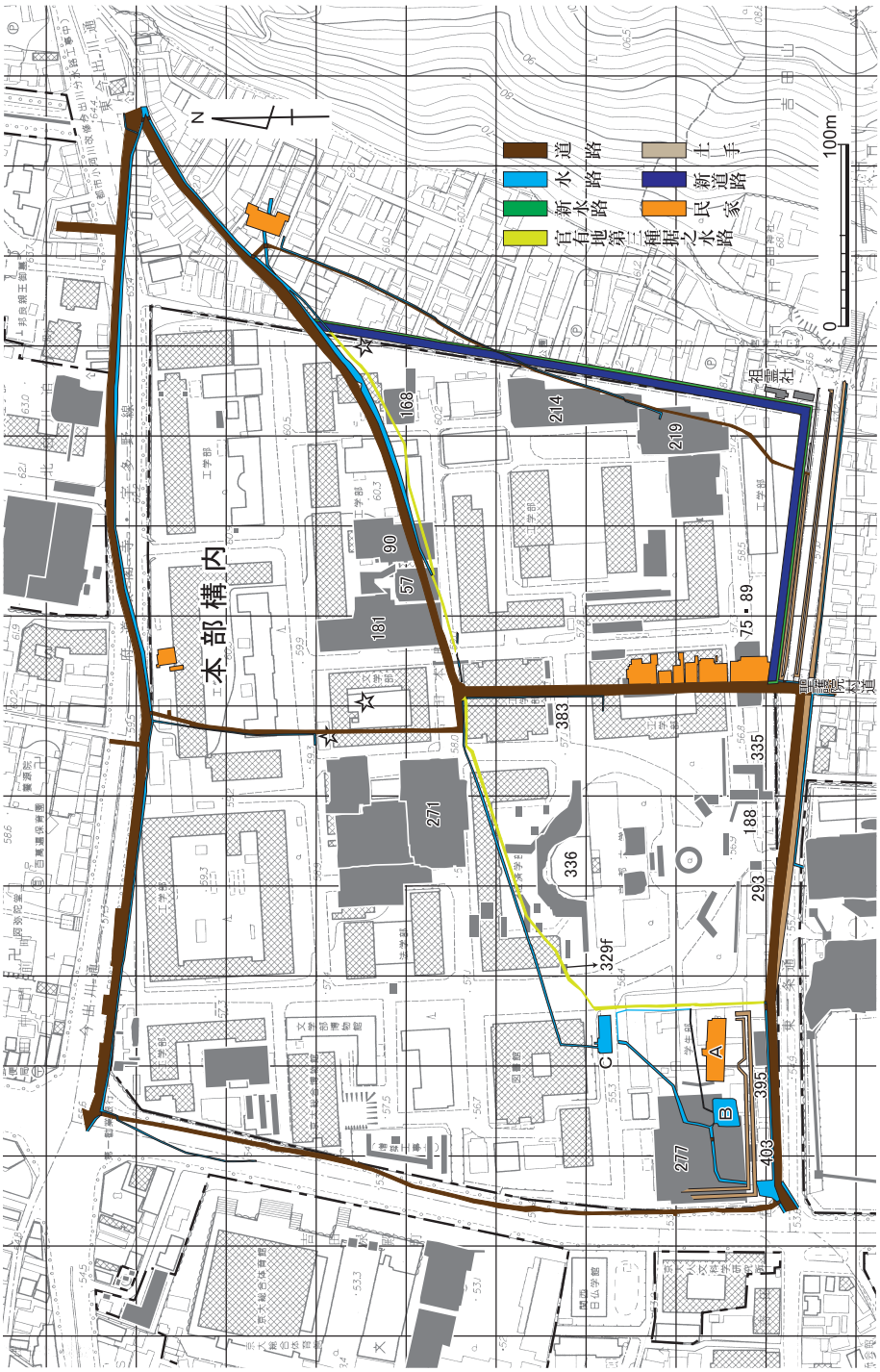
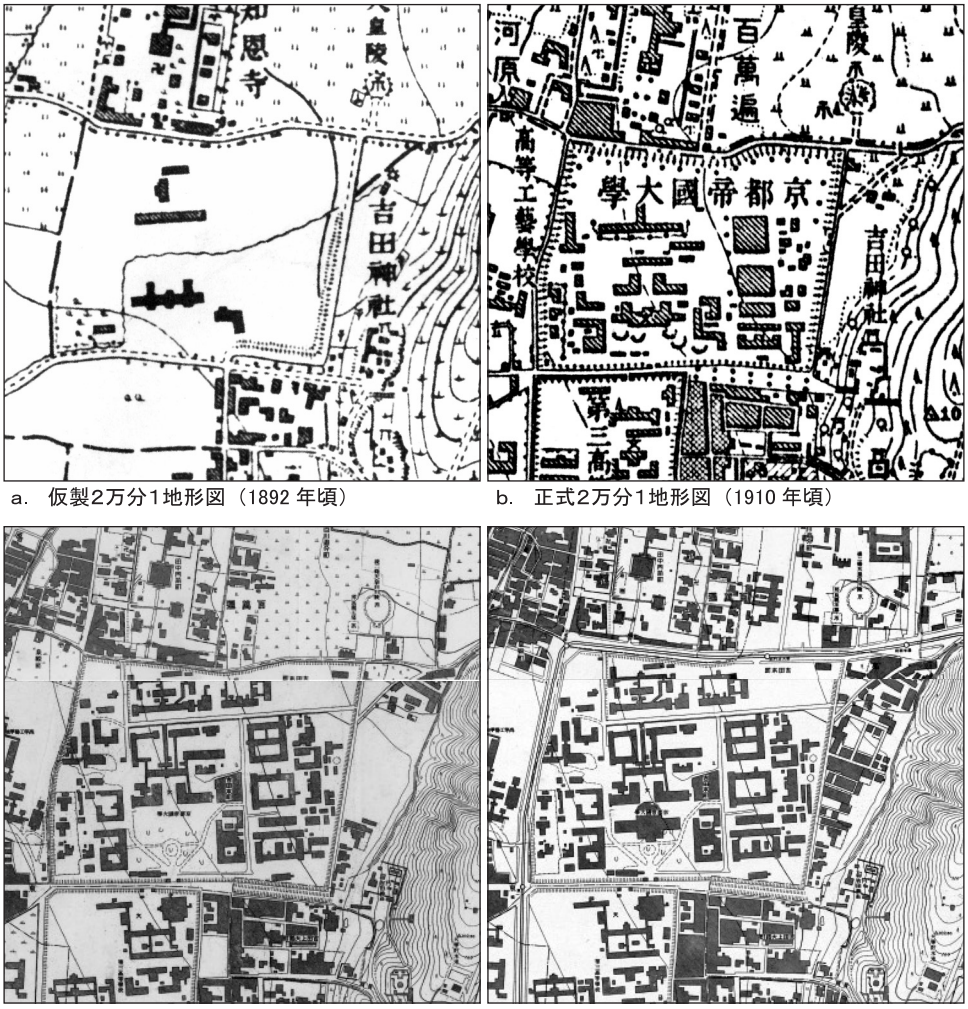


図101　「實測図」と現在の京都大学本部構内（梨地は調査地点で数字は地点番号。星印は2020年12月試掘地点）　縮尺1/4000



a.　仮製2万分1地形図（1892 年頃）　　b.　正式2万分1地形図（1910 年頃）

c.　都市計画図（1922 年）　　d.　都市計画図（1929 年）

図102　京都大学本部構内付近の地形図・都市計画図　縮尺1/12000

土手の撤去とともに一直線化がはかられた[9]。その契機は1897（明治30）年の京都帝国大学の設置とそれにともなう第三高等学校の南隣接地（現・吉田南構内）への移設にあったとみてよいだろう。第三高等学校の新たな敷地の整備とともに，両敷地を画する道路が整備されたと考えるのがもっとも自然である。なお，この現・東一条通は，仮製２万分１地形図では東大路との交差点付近で南西方向へと延びる白川道と合流していたが，正式２万分１地形図ではそのまま西へ延びる道路が新たに描かれている[10]。

それでは，西側および北側の敷地境界の変化はいつ生じたのであろうか。京都市によっ

て1922（大正11）年に作成された都市計画図（図３－ｃ）では，敷地境界の一部に土堤（石垣？）を示す記号が付されるものの，その場所に大きな変化はない。大きな変化を示すのは，1929（昭和４）年に作成された都市計画図（図３－ｄ）である。その特徴は，西側を画する道路（東大路）と北側を画する道路（今出川通）がほぼ直線道路となるように拡幅されていること，道路の中央に市街電車を走らせる軌道が描かれていることである。

この付近における市街電車の開通は，熊野神社―百万遍間（東大路）が1928（昭和３）年１月13日，百万遍－銀閣寺道間（今出川通）が1929（昭和４）年５月14日のことであった〔後藤1975〕。主要道路の拡幅をともなう市街電車の敷設は，上水道の整備，第二琵琶湖疎水の開削と並ぶ京都市三大事業の一つで，急激な人口の増加に備えて，京都の町並みは短期間のうちに大きく改造されることになった〔大菅2007〕。

本部構内の敷地境界に話を戻すと，1920年代末におこなわれた西側と北側の道路拡幅工事によって，西側は中央付近および北西角（百万遍）あたりで敷地をわずかに削るが，大部分は道路を西側へと拡幅した。北側については，西半は敷地を削ることなく北側へと道路を拡げ，すなわち北に隣接している知恩寺の境内を縮小し[(11)]，東半は敷地を削って道路を拡幅し，直線道路となるようにしている。これにより，現在に至る本部構内の境界は確定した。

３　尾張藩吉田屋敷の敷地境界について

尾張藩吉田屋敷は，幕末における世情の不安定を背景に，京郊外の地に諸藩が設置した藩邸の一つである。1863（文久３）年に土地が購入され，屋敷としての整備が進められたが，明治維新を経て1871（明治４）年には没収されている[(12)]。その地は，現・本部構内の西半にあたっており，藩邸の設置によって白川道は分断されることになった。

さて，尾張藩吉田屋敷の敷地や建物配置などを知ることができる絵図は３枚存在している。愛知県公文書館所蔵「吉田御屋敷之図」（１枚）と名古屋市蓬左文庫蔵「吉田御屋敷惣図」（２枚）である。このうち,「吉田御屋敷之図」〔笹川2018, 図83〕には敷地境界（堀）が描かれておらず，また北辺の広場も省略されている。「吉田御屋敷惣図」（以下,「惣図」と略す）は，ほぼ同形同大の２枚があり，敷地境界として四周に堀が描かれている（図103）[(13)]。本章では，敷地境界を描いている「惣図」と「實測図」および発掘調査成果の比較を通して，尾張藩吉田屋敷の範囲を改めて検討してみたい。

まず，尾張藩吉田屋敷の四周を画した堀跡とみられる遺構が本部構内のどの地点で見つ

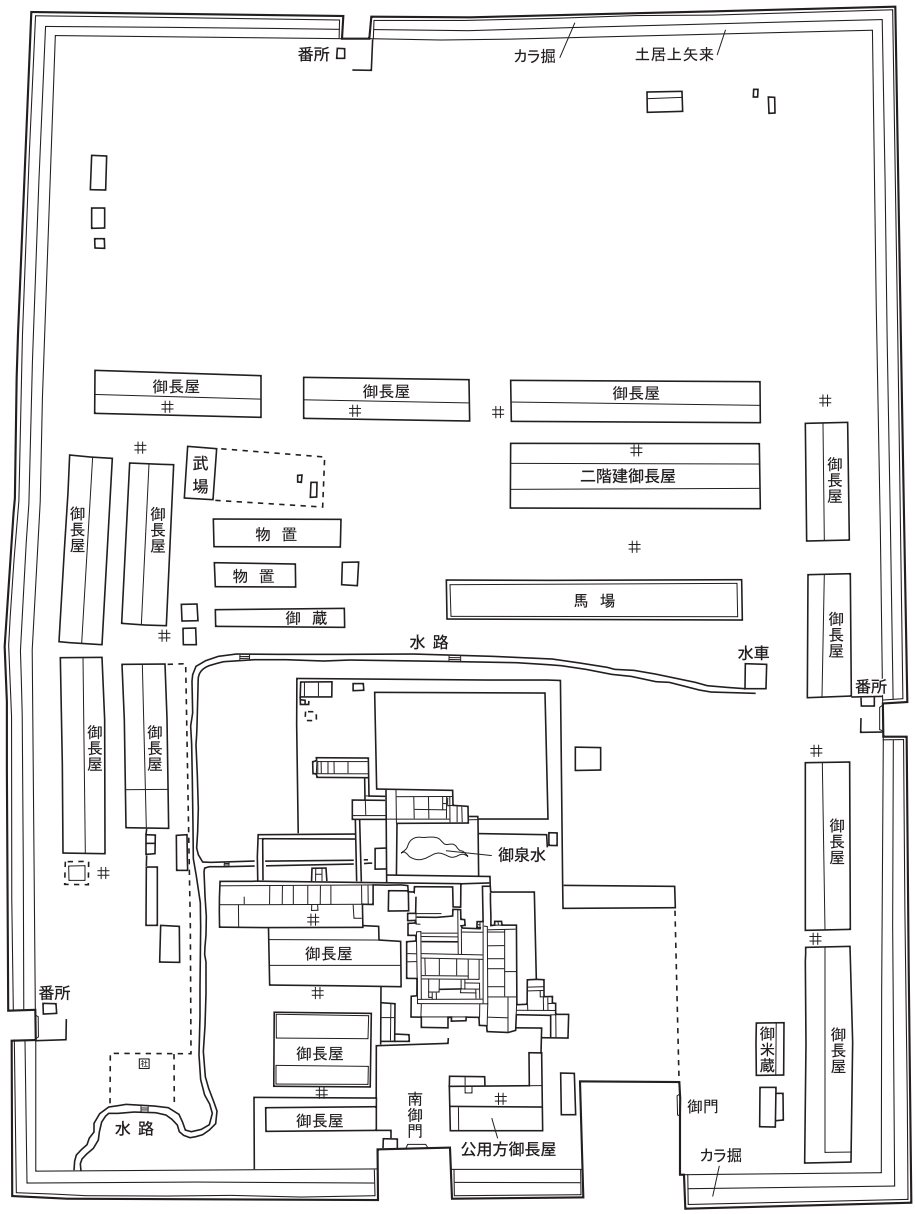


図103　尾張藩吉田屋敷（「吉田御屋敷惣図」名古屋市蓬左文庫蔵より作図，一部改変）

＊２枚ある「吉田御屋敷惣図」のうち，後から作成されたと想定されている図〔伊藤・梶原2007, p.194〕を元にした。主な違いは，新図で「南御門」とされた門が旧図では「表御門」とされていること，新図では四周を「カラ堀」とその内側の「土居上矢来」で囲っているのに対して，旧図では「カラ堀」だけで表現されていることである。井戸の数が旧図では少ないことも違いに数えることができる。

かっているかを確認しておく（図101）。現在までに関連遺構が検出された地点は７箇所ある。本部構内の南辺に偏っており，75・89地点では東南のコーナー，188・293・335・395地点では南を画する堀跡，277地点では西を画する堀跡が見つかっている。383地点の立合調査で認められた大きな落ち込みは，75・89地点で確認された堀跡の北延長線上にあたることから，この落ち込みは東側を画する堀跡の可能性が高いと理解している。

これらの確認地点は，「實測図」に描かれた既存道路の内側にあたっていることが注意される。75・89地点と383地点で確認された東を画す堀跡のすぐ東側は南北道路（聖護院村道）が延びている。75・89地点の調査では，藩邸の堀跡とみられるＳＤ１のほかに，近世道路ＳＦ１・ＳＦ２，溝ＳＤ２などが見つかっている（図104）。近世道路ＳＦ１・ＳＦ２は南北に延びており，ＳＦ１はその西端でＳＤ１から20m前後東に位置し，ＳＦ２は近代以降に破壊されているため残存状況がよくないが，３～４ｍほど東に位置している。ＳＤ１とＳＦ２の間に南北に延びるＳＤ２はＳＦ２の西側溝と考えられている。「實測図」との重ね合わせでは，ＳＦ２が「實測図」に描かれた南北道路に相当すると考えられるが，その東側をはしるＳＦ１との関係はどう理解したらよいのであろうか。

この点に関して報告者は，出土遺物の様相からＳＦ１は江戸時代中期以降の道路で，幕末に藩邸の堀が設置された際に堀に近いＳＦ２へと道路が移設されたと考えたが〔五十川1981〕，これらの道と藩邸の堀との時間的前後関係はおそらくその逆であろう。時期を特定できてはいないが，江戸中期以降，幕末にいたるまでのある時期に，南北道路はＳＦ１の道筋からＳＦ２の道筋へと移動しており，藩邸設置時にはその道路に合わせて堀の位置

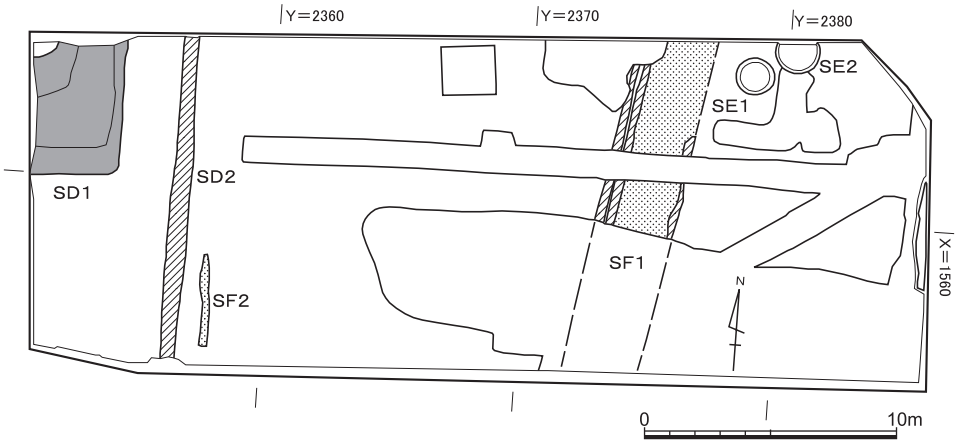


図104　75・89地点で検出した近世の遺構　縮尺1/300

が決定されたと考える[14]。

つぎに南を限る堀について検討してみよう。検出地点はほぼ東西に一直線上に並んでおり，堀はほぼ直線で整えられたと想定することができる。この場合，藩邸西半は「實測図」に描かれた東西道路の北側に接する地点にあたるが，この道路は東へ行くにつれて南へと折れており，東半では道路と堀の間に空閑地が生じたことが注意される。おそらくこれは，屋敷の正面である南側を直線にして偉容を整えたという理由のほかに，道に沿って堀を設けると，堀の東端が吉田神社参道にぶつかって支障が生じるという事情も考慮に入れられたと想定する。

最後に，西を画した堀についてみてみよう。西の堀跡は本部構内の南西隅（277地点）の調査区西端で確認されている。現構内の西を画している石垣の下に堀跡が存在することが確かめられており，「實測図」に描かれた南北道路の東側に接して堀が設けられたと復原することができる。

以上，「實測図」と発掘調査で判明した成果を比較検討したが，少なくとも構内の南半では，尾張藩吉田屋敷は「實測図」に描かれた道路に画された内部に設置されたことが明らかである。すなわち道路は敷地境界としての役割も果たしていた。この成果をもとに，発掘調査では不分明な北側へと推し量れば，北半においても道路で画された範囲内に藩邸が設置されたと想定するのが合理的であろう。

尾張藩吉田屋敷の範囲に関しては，発掘調査で確認することのできた東西の堀の位置に基づく藩邸東西規模を基準にして，「惣図」の図を現行の地図上に重ねた試みが存在する〔伊藤・梶原2007，図123〕。この復原案で問題となるのは，報告者もすでに言及しているように，藩邸北半の北西側と北側が本部構内の敷地境界，すなわち「實測図」に描かれた道路を大きく飛び越えてしまうことである。この点に関連して，百万遍知恩寺南門との関係で，現・今出川通が南側へ拡幅されたと報告者は想定したが，先述のように，この付近では今出川通は北側へと拡幅されており，それにともなって知恩寺の境内も北側へと縮小しているのである。

「『惣図』の縮尺はおおむね正しく，藩邸はほぼこのとおりに設置された」（p.195）との前提を報告者は採用し，もう一つの可能性，すなわち「『惣図』は，精度が低く歪んでいるのか，あるいはそのまま施工されなかった図」（p.195）という考えを採用しなかった。筆者の考えでは，尾張藩吉田屋敷の範囲は「實測図」に描かれた道路を越えて広がることはなく，「實測図」と現行地図との重ね合わせが正しければ，その範囲は本部構内の西半

にほぼ収まっているとみる。「惣図」は，藩邸の中枢部の建物が配置されている南半は比較的精度が高く描かれたと考えてもよいが，広場などがあって，それほど重要な施設が置かれなかった北側に関しては，それほどの精度を期待できないと理解する。

もう一つ，大きく問題となるのが，東側を画する堀の形状である。「惣図」では四周を巡る堀はいずれも一直線で描かれているが，筆者は東側に関しては，尾張藩吉田屋敷の境界となった南北道路（聖護院村道）が白川道の北側と南側でクランク状に接続していることから，堀もまたクランク状に設置された可能性を考えている。少なくとも南半では，堀は南北道路に沿う形で設置されていたことが発掘調査の結果から明らかである。この堀を単純に北へ延長させると，白川道を越えた北側では道路は堀の西側となってしまい，屋敷内にはいってしまうのである。

東西の北半分および北側を画する堀跡が見つかっていない現状では，叙上の考察は推定の域をでない。しかし，「實測図」に描かれた道路が尾張藩吉田屋敷設置時にも存在していたのであるならば，その屋敷は道路の内側に収まっていたとみるべきで，要するに現在の本部構内をはみでることはなかったであろうと考えるのである。

「惣図」には，南側に２箇所：南御門（表御門）と御門，東西および北側に各１箇所，藩邸からの出入り口が描かれている。これらに関する考古学的情報は得られていないが，東側の出入り口については，すでに言及されているように，白川道と南北道路の交差点付近に設けられたと考えてよいだろう[(15)]。

なお，尾張藩吉田屋敷の範囲が筆者の想定通りだとすると，その面積は２万8000坪（９万2561.84㎡）ほどと計算される。「吉田御屋敷惣図」には，３万3333坪（11万191.56㎡）と記されているので，この差異はかなりある。先に紹介した復原案では３万2000坪（10万57849.6㎡）ほどと計算できるので，面積的にはこちらの復原案の方が近い。その一方で，藩邸が没収されたときの文書「諸藩邸上地件」には，「表間口百四拾九間八寸，裏行百八拾九間四尺」と記され，ここから藩邸の面積を２万8330坪（９万3652.75㎡）ほどとする試算もある〔笹川2018，注51〕。この面積は筆者の推定と近い。

地積を求めるには，長さの測定が必要となる。1875（明治８）年に１間は曲尺６尺とし，６尺１分の「間竿」やそれを元にした「間縄」を用いて測量することに統一されたが，それまでは１間の長さは統一されておらず，いくつかの種類があった〔佐藤1986，p.14･p.222〕。当時，用いられた間竿の違いが数値の違いとなって現れている可能性も否定できない。ここでは，このような問題点があることを指摘し，今後の発掘調査に期待しておきたい。

4　「茅屋」と「水車」

第三高等中学校の同窓会，壬辰会が発行した壬辰会雑誌第６号（1892年）には，国文学者で俳人でもあった佐々政一（1872－1917）が醒雪の筆名で著した「過去之吉田村」という随筆が掲載されている〔醒雪1892〕[16]。その中から，本稿に直接関連する部分を以下に引用してみよう。

> 維新前は，村内に尾藩の留守屋敷あり。そが西端は，今の学校の界と同じけれど，東は今の吉田町を一直線に，化学教場の中央を通して，北方百万遍に出づる道路ありしが，是が堺なりしとぞ。我が物覚ゆる程の年にいたりし頃は，はや尽く取壊ちて，今の校の西南の隅に唯茅屋一軒のみ立てり。其の正北に水車一つ。東の道の東側に駄菓子屋（今の梅檐堂なり），稲荷下げせしとかや云ひて，持囃されし大工の家と其他三四の農家のみが，敷地内にありし人家なり。其他は，耕地・桐畝，東畔は樫・柏茂って神楽岡に連なれる林なりき。（句読点は筆者，旧字は新字に改めた。）

1872（明治５）年生まれの佐々が「我が物覚ゆる程の年にいたりし頃は」と記しているので，1887（明治20）年作成の「實測図」よりも10年ほど前の状況を描いていると思われるが，構内中央を南北に延びる道路（聖護院村道）が尾張藩吉田屋敷の東の境界であったことを記しつつ，西南の隅に茅屋が１軒，南北道路の東側に駄菓子屋，大工，農家が合わせて５，６軒あることを記している。「唯我が自ら見しかぎりを書いつけん」と記しているとおり，記述は具体的で，「實測図」に描かれた建物の数とほぼ一致していることに驚かされる。とくに注目すべきは，佐々が「西南の隅に唯茅屋一軒」と表現した建物で，この建物は「實測図」にも描かれている（図101－Ａ）。「茅屋」は，尾張藩吉田屋敷に由来する建物であると佐々が考えていたことが読み取れる。改めて，「實測図」の建物を見てみると東西35m，南北10mほどの規模をもつ長屋状の建物である。「吉田御屋敷之図」や「吉田御屋敷惣図」（図103）には，南御門（表御門）のすぐ西側に東西方向の長屋が描かれており，「吉田御屋敷之図」に描かれた池と「實測図」に書かれた池状施設（図101－Ｂ）との位置関係から見ても，「茅屋」がこの長屋にあたることはほぼ間違いないだろう[17]。また，この茅屋の「正北に，水車一つ」と佐々は記している。「實測図」には，この長屋状建物の北50m程のところに池状施設（図101－Ｃ）が描かれている。佐々の幼年時代には，この地点に水車が置かれて回っていたのであろう[18]。

水車を動かすには当然のこと，水流が必要となる。「實測図」にはこの池状施設には，北東の方向から水路が引かれており，これをたどると，もとは白川道の南側を流れた水路であった。「實測図」には似たような位置をはしる別の水路も描かれ，またそれ以外にも，

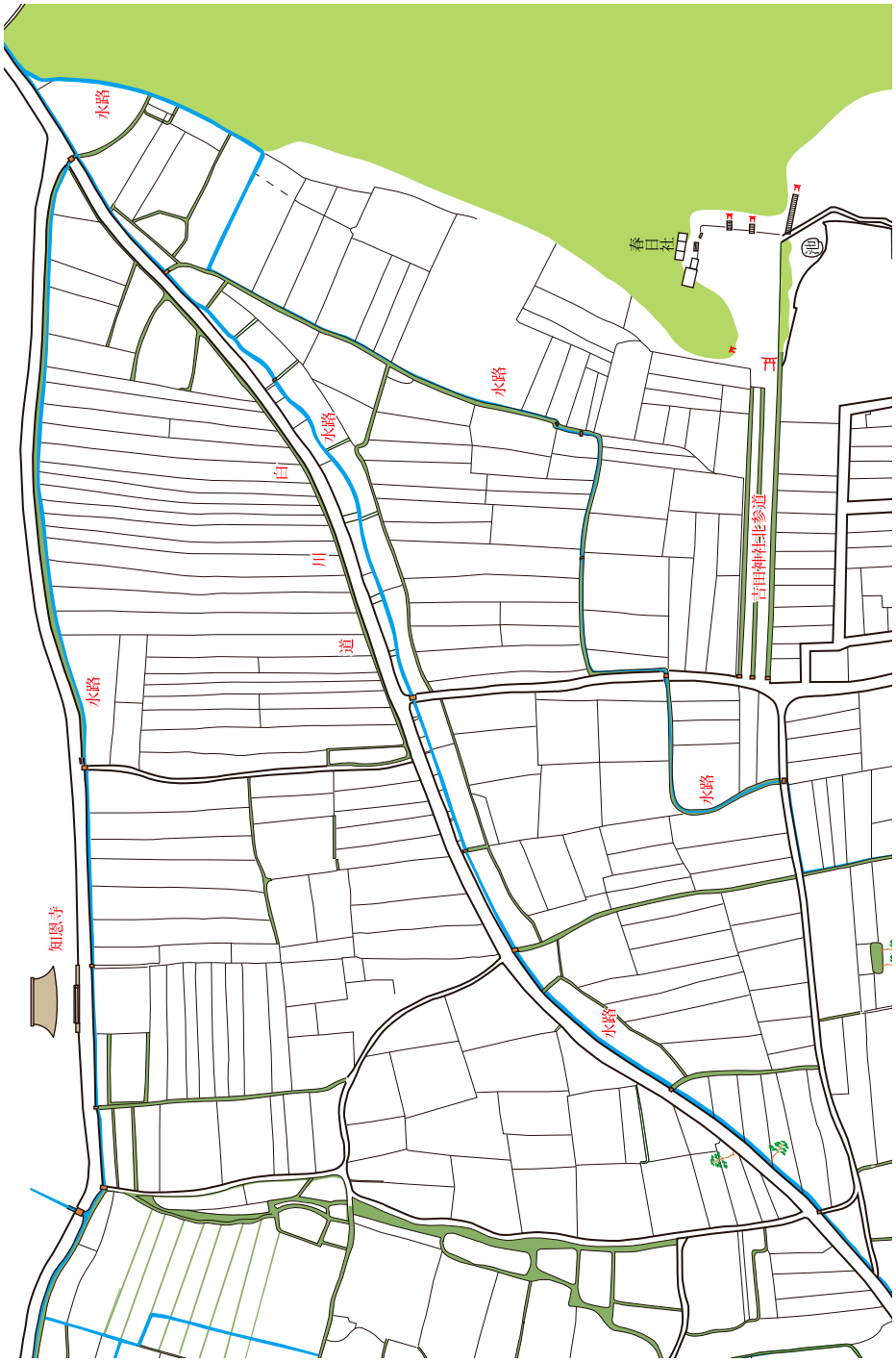


図105　江戸時代の京都大学本部構内付近（「山城國吉田村古図」京都大学総合博物館蔵より作図，一部改変，赤文字は加筆）

用地内をいくつかの水路が存在していたことが判明する。このような水路は，江戸時代の村絵図「山城國吉田村古図」や尾張藩吉田屋敷を描いた「吉田御屋敷之図」・「吉田御屋敷惣図」にも記され，また発掘調査でも検出されている。そこで最後に，この地一帯における水利の問題について概観して，本稿を閉じることにしよう。

18世紀後葉～19世紀初頭に成立したとされる「山城國吉田村古図」は，田畠が一筆ごと記され，道路のほかに，水路（青色），畦・畦道・土手・笹原など（緑色）[19] などが描かれる。図105は，「山城國吉田村古図」から現・本部構内付近にあたる場所を取りだして作図したものである。北東から南西へ白川道が延びていること，白川道をはさんで南北道路（「實測図」に描かれた聖護院村道）や現・今出川通りの北側に知恩寺が存在することがわかる。このうち，青色で彩色された水路は，白川道の南側に沿ってはしる水路のほかに２本確認できる。一つは，現・今出川通の南側に沿ってはしる水路であり，白川道との合流地点で白川道の南側の水路から分岐させて水を流している。もう一つは，吉田山の北西麓で前者と同様に白川道の南側水路から分岐させ南へ下った後，西へ折れ曲がり，しばらく延びてから南へ方向を変えている水路である。このように，井戸を別とすれば，江戸後期における，この地一帯の主たる水源は白川道に沿って流れていた水路であった。

それでは，幕末期に白川道を分断した尾張藩吉田屋敷では，この白川道の南をはしる水路はどのように処理されたのであろうか。「吉田御屋敷之図」・「吉田御屋敷惣図」（図103）には，屋敷のほぼ中央付近を東端からから西へと延びたのち，南へと折れ曲がって南西隅から屋敷外へと排出された水路が描かれている。両図を比較すると，そのコースや南流した水路が西へとコースを変える付近に，前者には池が記載されるのに対して，後者は巾着袋状に膨らんでいるだけで池は描かれていないなど，細かな点では違いが認められるが，屋敷内を北東方向から南西方向へと水路を巡らしていたことは確認できる。

この水路は，「吉田御屋敷之図」には「川」という記載がなされ，長屋の間を抜けて東側へと抜けており，屋敷の東側から引かれていることがわかる。「惣図」では，水車と記載された地点から始まっており，この水がどこから引かれたのか判然としないが，その東側が東への出入り口にあたっていることが注意される。この出入り口は白川道を分断したあたりに設置されたと考えられるので，「御屋敷之図」で示唆されるように，白川道の南を流れていた水路から，水を屋敷内に取り込み，水車へと引いたと想定することは可能であろう。そして，それは「川」と記載されるぐらい，豊かな水量があったのであろう。

つぎに，尾張藩吉田屋敷が接収された15，６年後の1887年に作成された「實測図」に再

び戻って，水路がどのように描かれているのかについてみてみよう。この測量図に付された凡例には，水路が３つに区別されて記されていた。「水路」と「新水路」および「官有地第三種据之水路」である（図100・101）。

このなかで，「新水路」は第三高等学校設置にあたって新たに設けられた道路（東を画するものと吉田神社参道と敷地を画するもの）の側溝として新たに設けられたものである。「水路」とされたものは，①今出川通の南側溝，②東半では白川道に沿ってはしりつつ，西半では２つの池状施設を経ながら南西隅へと抜けていく水路，③敷地の東側を敷地外から敷地内へと南北に延びている道路に沿ってはしる側溝，④白川道の南側の水路から南へ分岐した南北道路（聖護院村道）の西側溝などが認められる。

「官有地第三種据之水路」とされたものは，白川道が学校敷地にはいる付近あたりで，②とした白川道に沿って延びる水路と分岐しつつも平行して流れ，「水路」にともなう池状施設の東側で南へ折れて構外へと続く水路である。中央付近では，「水路」と合流している箇所があることも見て取れる。「官有地」とは太政官布告第114号（明治６年）で，明治政府によって民有地とは区別された土地である。４つに区分され（第１種：皇宮地，第２種：皇宮賜邸，官用地，第４種：学校・病院），第３種には民有地ではない，山林・丘陵・原野・湖沼・池・溝・道路・田畑・屋敷・行刑場・旧跡・公園など多くの地目が含まれた。

第三高等中学校が吉田村のこの地に移転することが決まったとき，用地内には「水路」と「官有地第三種据之水路」の２本が一部の箇所では合流しつつ，ほぼ同じような位置を平行して流れていた。これは，なぜなのであろうか。白川道が現存していた東半部分で「山城國吉田村古図」を見てみると，白川道と水路のあいだには間隔があったことがわかる（図105）。図101－57地点〔岡田・吉野1980，第14図〕および90地点〔五十川1983，図３〕における発掘調査では，江戸時代の白川道の南側に野壺が並び，その南側を水路がはしっていた状況をとらえており，これは「山城國吉田村古図」と一致している。また，図101－168地点の調査〔清水1989，図27〕では，「官有地第三種据之水路」と重なる調査区の北西辺で近世の溝ＳＤ８が検出されている。こうした状況を勘案すれば，「官有地第三種据之水路」が白川道の南側を本来，流れていた水路であることが明らかであろう。

一方，西半部分では，尾張藩吉田屋敷の絵図に描かれた水路と関係するのは池状施設との関係からみて，「水路」であり，図101－277地点の調査〔千葉・阪口2006，図50・67〕ではこの「水路」が幕末に設置されたことを明らかにしている。藩屋敷の設置によって白川道が廃絶している西半部分では道路と水路の位置関係は不明な部分が多いが[20]，図101

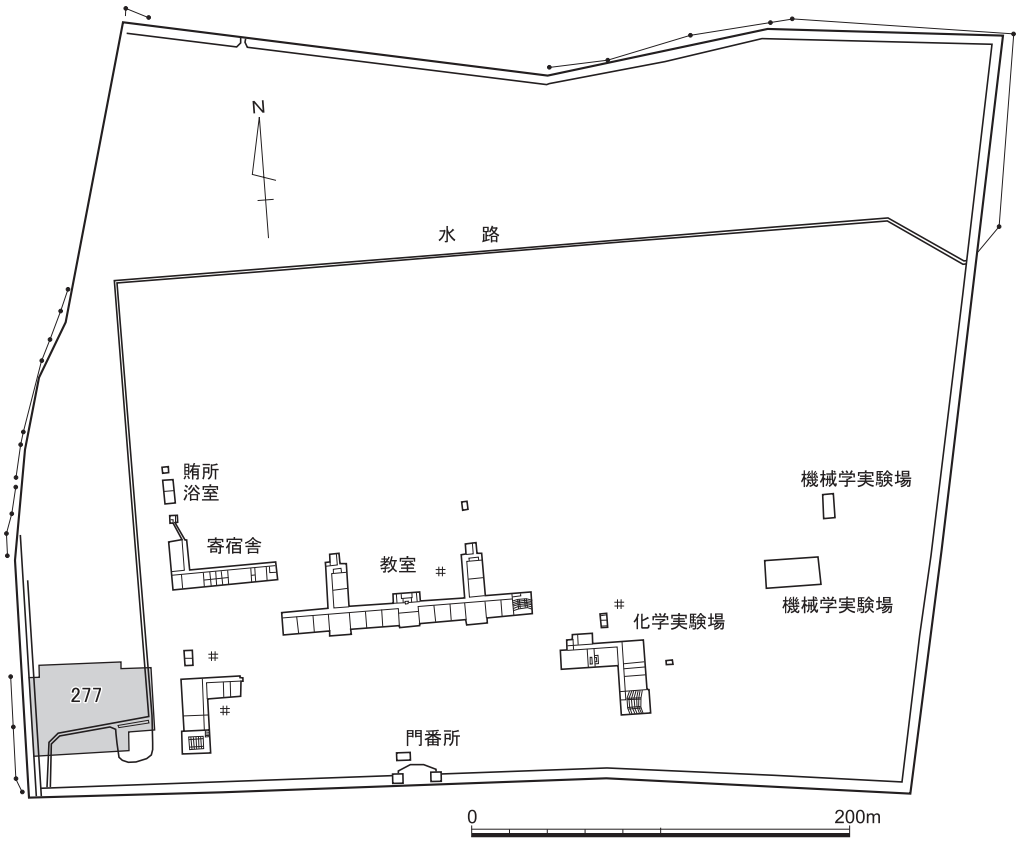


図106　1897（明治30）年の京都大学本部構内（「京都帝国大学構内略図」施設部蔵より作図）
縮尺1/4000

－329ｆ地点〔伊藤2009，図27〕では近世白川道の路面が確認されている。筆者の重ね合わせではこの地点付近を「官有地第三種据之水路」がはしっており，「山城國吉田村古図」では，このあたりでは水路は道路と接してはしっている。南北方向に流れる部分は明らかに異なるが，西半でも「官有地第三種据之水路」が白川道の南に沿って流れていた本来の水路の名残であった可能性が高い。

このような想定が正しければ，「官有地第三種据之水路」が白川道の南側を流れていた本来の水路（旧水路）であり，ここで問題にしている「水路」は藩屋敷の設置にともなって，作られた新しい水路ということになる。尾張藩吉田屋敷の絵図には，旧水路に比定できるような水路は描かれていない。そうではあるけれども，「實測図」に描かれている以上，藩屋敷の時代にも，旧水路は存在して機能していたと考えるのが自然である[21]。

注

図106は，1897（明治30）年，京都帝国大学が設置され，第三高等学校の敷地と校舎が大学へと譲られた際の施設配置図である。白川道に沿ってはしっていた北東方向から南西方向へと延びる水路は姿を消しており[22]，水路は構内北寄りの地点を東西に延びて，西端で折れ曲がり南流し，南端で調水施設とみられる池状の施設へと流れ込んだのち，西へと向きを変え，南西隅で再び南へ折れて，構外へと続いている。構内南西隅の277地点の発掘調査では，当時の水路と池状の調水施設を確認している〔千葉・阪口2006，図67〕。

当然ながら，白川道も南北道（聖護院村道）も近代の学校建設にともない姿を消した。自然地形を継承し，少なくとも江戸時代から続いていた水路も，校舎の配置に支障が出ないように，東西・南北と直線的に延びるように変えられ，その姿を前代とは大きく変えてしまった。東端で白川道の水路と接続していたと考えられること，南西隅の池状施設に前代の名残を見ることはできるが，近代化の波はこのような部分にもあらわれたのであった。

謝　辞　京都大学文書館の西山伸氏・橋本陽氏には，館所蔵史料の閲覧・調査に多大な便宜をはかっていただいた上に，公表をご許可いただいた。また，上杉和央氏（京都府立大学），古関大樹氏（京都女子大学）には，地図や測量技術に関して有益なるご教示をいただいた。ここに記して，厚くお礼申し上げる。

〔注〕

（1）　京の七口の一つである荒神口から，白川，山中を経て志賀峠を越え，近江坂本へと至る道路は，古くは志賀山越と呼ばれたようで〔増田2006〕，志賀越道，今道越，山中越，山中路，志賀街道などとも呼称された。京都大学の所在する付近では，白川道と呼ぶことが多いので，本稿ではそれに従っておく。

（2）　京都大学総合博物館所蔵（日本史研究室旧蔵，標本乙４－37）。この村絵図に関しては，吉江崇の紹介があり，18世紀後葉～19世紀初頭に作成されたものと推定している〔吉江2006〕。

（3）　同文書館には，「山城國愛宕郡吉田村第三高等中学校豫定敷地實測図」と「第三高等中学校全体図面」の標題をもつ，敷地全体を測量した図面が収蔵されている。前者は縮尺1200分１，後者は300分１で作成されており，本稿で紹介する測量図と同類であるが，予定校舎と水路を描くのみで，当時存在していた道路や民家などは描かれていない。本稿で紹介する測量図がもっとも詳細である。

（4）　敷地面積をメートル法に換算すると，約174,488㎡となる。この敷地を受け継いだ本部構内の面積は162,270㎡とされており（www.kyoto-.ac.jp/ja/about/public/issue/ku_profile/documents/2019/20.pd：2020年５月28日閲覧），およそ12,000㎡少ない。本学施設部が所蔵する「京都帝国大学略図」のうち，第三高等学校から敷地を受け継いだ明治30年版では，敷地の面積を「四万九千二百七十七坪九合二勺」とする。162,902㎡ほどとなり，東を画するための新設道路を敷地から除外すれば，現有面積とほぼ等しいことがわかる。「實測図」に記された

敷地面積とその後の面積とのズレがどうして生じたのか，現状では不明である。

（５）　明治時代に作成された地籍図などは，１間（1.8181m）を１分（3.0303㎜）の割合で縮小した600分１の縮尺が原則とされ，これは伝統的な縮尺であったとされる〔佐藤1986，pp.257－258〕。

（６）　建設予定の校舎には，「今回建築スヘキ分」と書かれ，濃い赤色の太線で縁取られたものと細線で描かれたものがあるが，結局建設されなかった校舎や設計が変更になった校舎があった。図106は1897（明治30）年，京都帝国大学が設置されたときに第三高等学校から譲り受けた施設の配置図であるが，この図と比較すれば，校舎建設が予定通りには進まなかったことがわかるであろう。

（７）　江戸時代の村絵図「山城國吉田村古図」では，取得用地（現・本部構内）の範囲に描かれているのは，田畑と道路・水路・土手などであり，発掘調査でも江戸時代の遺構として見つかるのは，耕作に関連すると思われる野壺，小穴（柵列），溝のほかは道路や水路である（図101の57・90・181地点など）。幕末に尾張藩吉田屋敷が設置されたことにともない，それに関連する堀跡や水路，遺物溜などが見つかっているが（図101の277・336地点），藩屋敷廃絶後は再び元の姿に戻ったようである。

第三高等中学校が移転してくる直前あるいは直後のこの地の景観を記したものとして，佐々政一や喜田貞吉の記述がある。喜田はこの一帯には桐や麦，茶などの畑が広がっていて，目を遮るような建物は存在しなかったと述べている〔喜田1928〕。佐々の記述に関しては，第４章で詳しく取り上げる。

（８）　微妙なズレが生じる理由としては，当時の測量技術による精度の問題や現在の土地境界が当時の境界とわずかながら異なっていることなどが考えられる。

（９）　ただし，直線化された道路は道幅が依然狭く，東端では２線ある吉田神社参道の北側の道へと接続していた。1922（大正11）年の都市計画図では，道路が南側へ拡幅され，吉田神社参道にほぼ対応する道幅へとかわっている。

（10）　本学施設部には，吉田キャンパスの建物の変遷を示す「京都帝国大学略図」が残されている。それによれば，東一条の交差点から西へ向かって延びる道路は，1906（明治39）年の平面図には描かれず，初見は1907（明治40）年の平面図となる。この頃，道路が新設されたことが判明する。

（11）　先述した1922（大正11）年と1929（昭和４）年の都市計画図を比較すれば，道路の北側への拡幅にともなって，知恩寺南辺の建物が規模を縮小していることを読み取ることができる。

（12）　尾張藩吉田屋敷の土地買い上げの経緯やその背景，整備の状況などは笹川2018を参照のこと。

（13）　２枚ある「吉田御屋敷惣図」の細部の差異や「吉田御屋敷之図」との関係，作成順序などは，伊藤・梶原2007，笹川2018を参照のこと。

（14）　「山城國吉田村古図」に描かれた南北道路（図105参照）は，吉田神社北参道との位置関係から判断すると，ＳＦ２に比定できると考えられる。この村絵図の作成は，18世紀後葉～19世紀初頭と考えられているので，このときにはすでにＳＦ１は廃され，ＳＦ２へと移っていたと理解してよいだろう。

（15）　「惣図」には東側出入り口のやや西寄りの地点に「水車」と記し，ここから西方へ水路が延びている。この水車の水源としては，白川道の南に沿ってはしる水路と今出川から南流する水路の可能性が考えられる。次章で詳述するが，前者の場合，「水車」が出入り口より北側に描かれているので，この出入り口は白川道より南側，南北道路が白川道にぶつかる手前あたりに設けられたとも想定できる。

(16)　同文章は，京都市編『史料　京都の歴史』8（1985年，p.233）に採録されている。

(17)　なお佐々の文章には記述が見られないが，「實測図」には，長屋状建物（図101－A）の南側に東西に延びる二重の土手が描かれている。この土手は，長屋状建物の東端の位置で北へとわずかに折れ曲がり，また西側の端も北へと折れ曲がり，少し延びたところで消えている。尾張藩吉田屋敷には，堀の内側に「土居」が設けられたことが「惣図」（図103）に描かれる。「實測図」に描かれた土手は，その位置から判断して尾張藩吉田屋敷の「土居」の名残の可能性があろう。その北に位置する建物が南御門のすぐ西に位置する長屋であるという想定とも重ね合わせれば，建物東端の位置で北へと折れ曲がって終わっているのは，ここに南御門が位置し，堀と「土居」が途切れていたためと説明できる。「惣図」には西の区画の南辺に近い位置に藩邸からの出入り口が描かれている。北へ折れ曲がった土手が少し延びたところでなくなっている地点あたりに，「土居」が途切れる西出入り口が存在したと想定してもよいのかもしれない。

(18)　「第三高等中学校予定敷地実測図」には表現されていないだけで，この当時にも水車が存在していた可能性はあろう。

(19)　道路は白抜きの２本線で表現されている。彩色のうち，青色は水路である。道路に沿ったライン，田畠の境界，水路の片側あるいは両側のライン，吉田山などが緑色で表現される。「笹原」と注記されている部分もある。畦・畦道・里道・土手・笹原・荒地・山林などが緑色で表現されていると理解する。

(20)　本部構内南西隅の277地点〔千葉・阪口2006，図40〕および，その南側の403地点〔笹川2016，図120〕では，近世白川道の南に接して水路が確認されており，この状況は「山城國吉田村古図」の描写と一致している。この地点の水路は，尾張藩吉田屋敷の設置にともなって，白川道とともに廃絶している。なお，403地点では白川道の廃絶後に，東西方向に延びる溝ＳＤ１が掘削されている。その位置や幅から判断して，報告者も指摘するように，藩屋敷を画した堀跡とはみなせないが，藩屋敷に関連する溝とみてよいだろう。

(21)　それにしても，なぜ同じような位置をはしる２本の水路が必要であったのか。その理由として，ひとつ考えられることは，現在，時計台記念館のある地点の西側付近あたりに藩屋敷の御殿空間を比定することができるが，南側の建物（表御殿？）と北側の建物（奥御殿？）のあいだに「御泉水」とされる場所が「惣図」に描かれていることである（図103）。池泉をもつ庭園があったことがわかる。「惣図」に描かれた水路は，この泉水の北側を大きく迂回して描かれており，この水路から水が引かれたとは考えにくい（なお，御泉水から西側へ水路が延びて，大きく迂回してきた水路と合流しているが，東が高く西へ向かって低くなる地形から考えても，これは引水ではなく排水のための水路と考える）。湧水のあるような地形ではないため，池泉のためにはどこかから水を引く必要が生じる。白川道の南側をはしっていた本来の水路が，この池泉への水の供給のために利用された可能性はないであろうか。池泉へ引く水と日常的な生活に関係する水は用途が異なるために区別され，同じような場所を通しながらも，２つの水路が利用された。そして，池泉へと引かれた水路は，もともとあった水路であり，新たに設置したものではなかったために，藩屋敷の絵図には描かれなかった。このように考えれば，先の問いかけの一応の答えにはなるであろう。

(22)　1892（明治25）年に刊行された「仮製２万分１地形図」（図102－ａ）には，「官有地第三種据之水路」に相当すると考えられる水路が描かれており，学校建設後もこの水路がしばらくの間は，利用されていたことがわかる。

〔引用・参考文献〕

五十川伸矢　1981年「京都大学本部構内ＡＴ27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
五十川伸矢　1983年「京都大学本部構内ＡＸ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
伊藤淳史　2009年「第５章　３　本部構内の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2004～2006年度』京都大学文化財総合研究センター
伊藤淳史　2020年「道路遺構の考古学的検討に向けて―京都大学構内遺跡での検出事例から―」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2018年度』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門
伊藤淳史・梶原義実　2007年「京都大学本部構内ＡＵ25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2002年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
植村善博　2011年『京都の治水と昭和大水害』文理閣
植村善博・上野裕編　1999年『京都地図物語』古今書院
大菅　直　2007年「4.3 道路の拡幅と土地区画整理事業」『京都地図絵巻』古今書院
大塚隆編　1994年『慶長昭和京都地図集成』柏書房
岡田保良・吉野治雄　1980年「京都大学本部構内ＡＷ28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
喜田貞吉　1928年「學校街の「草分け」は三高」岩井武俊編『京ところどころ』金尾文淵堂
京都市編　1985年『史料　京都の歴史』８，平凡社
金田章裕　2016年『古地図で見る京都　『延喜式』から近代地図まで』平凡社
金田章裕　2017年『江戸・明治の古地図からみた町と村』敬文社
金田章裕・上杉和央　2007年『地図出版の四百年―京都・日本・世界―』ナカニシヤ出版
後藤恭生　1975年「第５章 都市圏の拡大 第３節 交通網の整備」『京都の歴史８　古都の近代』京都市史編さん所
笹川尚紀　2016年「京都大学本部構内ＡＴ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』京都大学文化財総合研究センター
笹川尚紀　2018年「土佐藩白川邸・尾張藩吉田邸にまつわる覚書」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2016年度』京都大学文化財総合研究センター
佐藤甚次郎　1986年『明治期作成の地籍図』古今書院
清水芳裕　1989年「京都大学本部構内ＡＸ30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
醒雪（佐々政一）　1892年「過去之吉田村」『壬辰会雑誌』第６号
千葉豊・阪口英毅　2006年「京都大学本部構内ＡＴ21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2001年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
千葉豊・笹川尚紀　2016年「京都大学本部構内ＡＵ27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』京都大学文化財総合研究センター
辻ミチ子・前田訣子・飛鳥井雅道　1975年「第３章 文化都市の興隆 第１節 学問の都市」『京都の歴史８　古都の近代』京都市史編さん所
中川　理　2015年『京都と近代　せめぎあう都市空間の歴史』鹿島出版会
中川　理　2019年「外郭道路（北大路・西大路など）と区画整理」『地図で楽しむ京都の近代』風媒社

注

西山　伸　2019年「東大路沿いの石垣は尾張藩屋敷時代からのものか」『京都大学　大学文書館だより』第37号
濱崎一志　1983年「浄蓮華院と吉田の構―応仁の乱後の吉田の復元的考察―」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
増田　潔　2006年『京の古道を歩く』光村推古書院
山村亜紀　2019ａ年「吉田神社と共存する京都大学」『地図で楽しむ京都の近代』風媒社
山村亜紀　2019ｂ年「地図と景観から歴史を読む―京大以前の吉田を探して―」『総人・人環フォーラム』第37号
吉江　崇　2006年「中世吉田地域の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2001年度』京都大学埋蔵文化財研究センター

＊図102は，https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/ModernKyoto/（近代京都オーバーレイマップ）を元にして，一部改変しつつ作図した。
＊本稿は，2019年度科学研究費補助金基盤研究（Ｃ）「都市近郊歴史像の再構築―京都・白川道の研究を基盤として―」（課題番号19Ｋ01094）の成果の一部である。

［付　記］　本稿脱稿後の2020年12月21日から25日にかけて，尾張藩邸の東側の堀跡の確認および中世白川道のルートおよびその構造の解明を目的とした試掘調査を実施した。前者の目的のために２箇所（文学部東館中庭地点と東館北側地点），後者の目的のために１箇所（総合研究７号館東側）の計３箇所の調査区を設定した（図101の星印）。文学部東館中庭および総合研究７号館東側の調査地点は2019年12月14日に，天理大学文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻の教員・学生諸氏のチームのご助力を得て，地中レーダー探査をおこなった地点であり，試掘の結果とレーダー探査の解析結果との比較照合も一つの目的としている。

本稿の内容に直接関連する堀跡の調査に関しては，文学部東館中庭地点および東館北側地点ともに近代以降の造成や既存の管路などで，遺跡が大きく破壊されていたが，中庭地点で東へ向かって下がる落ち込みを発見した。既存管路の関係で，この落ち込みの幅や長さなどは確認できなかったが，検出した位置から判断すると尾張藩吉田屋敷の東を限る堀跡の可能性も考えられる。これが尾張藩邸堀跡だとすると，東側の堀はクランク状にならずに一直線であった可能性が高まり，クランク状になるという本稿の想定は誤っていたことになる。2021年度に新たな調査を計画して，東館中庭地点で検出した落ち込みの性格を明らかにする課題に取り組む予定である。

地中レーダー探査および試掘調査は，いずれも科学研究費補助金：基盤研究(C)19K01094「都市近郊歴史像の再構築―京都・白川道の研究を基盤として」における研究計画の一環として実施しており，2021年度に実施予定の調査も含めて，詳細は報告書に掲載の予定である。